

実践する

留学生に対する日本人協力者の個人化した説明が

談話の展開に与える影響

鈴木 伸子

要旨

日本事情を学ぶ留学生と日本人協力者の接触場面では、しばしば日本の文化的な話題が取りあげられて協力者が説明をすることがある。本研究は、その時に現れる社会一般的な観点と個人的な観点の二種類の説明が談話の展開に与える影響を質的に分析した。分析の結果、文化的な話題の場合は、社会一般的な発話に較べて個人的な発話のほうが談話の展開を促す傾向のあることがわかり、日本事情で教授すべき文化について有益な示唆を得た。

キーワード：接触場面 話段 相互テーマ展開構造 「意義」と「意味」

1. はじめに

近年、国内外の日本語教育現場では、社会文化的な側面への理解やインターアクション能力の向上を目指し、日本語母語話者（以下 NS）との接触場면을授業に導入する試みが多数登場した。日本人を教室に招くビジターセッションや日本人宅への家庭訪問（尾崎・ネウストプニー1986、舩見蘇 1997 など）はその代表といえよう。これらの活動では、日本人協力者との接触を通じて言語的トレーニング（非言語行動や行動様式を含む）を行うと同時に、会話の内容やその場面状況から文化を体験的に学ぶことが目標とされる。そのため、活動にはしばしば日本人とのディスカッションやインタビューが含まれ、日本人側が社会文化的な事柄について説明をすることが多い。筆者がアシスタントとして携わった留学生による家庭訪問（詳細は鈴木 2004※印刷中）でも同様の場面が数多く見られた。

筆者は、その際に記録した留学生によるインタビューを集中的に聞き、日本人協力者の社会文化的事項の説明には、辞書的な説明とごく個人的な経験に基づく説明が存在するよう感じた。この二つは何を意味し、談話展開や文化学習に異なる影響を与えるのだろうか。本稿では、日本人協力者による二種類の説明の存在とそれらが留学生の発話や談話全体に与える影響を調べつつ、日本語教育における文化の問題について検討を試みる。

2. 先行研究

社会の多文化傾向や多様性が叫ばれるようになって久しい。特に 90 年代以降は文化人類学や社会学など多くの学問領域で、文化を「境界線に囲まれた一枚岩的で自明な統一体としてみる見方」（箕浦 2002：p.1）が後退し、「今まで統一体だと思っていたものは実は多様な価値を内包した雑種的なもの（hybridity）」（箕浦同）と認めるようになってきた。

こうした流れを受け、日本語教育でも何を「文化」として教授すべきなのかという議論が浮上し、もともと多様で固定化していないものを「日本」「日本人」として教える行為

そのものを問題視する指摘（門倉 2001 など）が現れた。確かに「日本文化」「日本人」「日本社会」いずれも統一体として捉えきれないものを、無理に境界線を引いて教える行為は時代に逆行するばかりか、現実を歪め、ステレオタイプを強化する危険性がある。河野（2000）でも、日本語による接触場面には「教える日本人／教わる外国人」というカテゴリーが浮上しやすいことから、日本人学生と留学生による「異文化コミュニケーション」の授業が時として多様性を排除した「〇〇人」の強調に終わりかねないと指摘する。

しかし、日本語の指導ではこの「教える日本人／教わる外国人」カテゴリーがア・プリオリだからこそビジターセッションやインタビューが「日本人の話聞く」「質問する」等の言語学習として成立するという側面がある。また、日本語に限らず多くの学習者が「〇〇語」「〇〇人」という統一体の存在を前提にして外国語とその文化の学習を始める現実を考えると、この「教える日本人」カテゴリーを逆手にとってカテゴリー内部の多様性や境界の曖昧さに気づいてもらうほうが「文化」の学習としては実際的と言えよう。

それゆえ、接触場面を学習に活用する教師は、日本人の「教える」内容が、統一体を連想させる画一的なものか、逆に多様性を連想させるものか、という点に注目すべきである。筆者の感じた辞書的な説明と個人的な経験に基づく説明は将にこの二つに対応するものであるが、これまで殆ど注目されていない。また、前述した分野の先行研究は大半が理論研究か会話分析によるもので、言語的特徴を数量的に扱う談話分析での実証研究は稀である。

3. 本研究のデータと研究方法

3.1. データの概要

分析対象としたのは、都内の四年制大学に通う留学生二名と、初対面の日本人夫妻二組による二回分の会話データである。二名は当時、留学生向け「日本事情」クラスを履修中で、『日本について調べる』という大きな課題の下、グループごとにテーマを設定して調査を行うプロジェクトワークに参加していた。家庭訪問はこの調査のための任意の活動で、希望した留学生のみ日本人協力者宅を訪れてテーマに応じたインタビューを行った。

3.2. 会話参加者のプロフィール

① 留学生（二名）

留学生二名は、正式には「日本語・日本文化研修留学生」と呼ばれる国費留学生で、日本語・日本文化の学習を留学の目的とする。滞日期間は 2001 年 10 月から 2002 年 9 月までの一年間で、プロフィールは以下の通りである。また、日本語のレベルは筑波大学留学生センター開発の SPOT (Simple Performance Oriented Test) ⁱ の A タイプで測定をした。

◎表 1：留学生のプロフィール

仮名	出身国	使用可能言語	SPOT 得点 (65 点中)
S	アメリカ (日系二世)	英語・日本語	65
K	シンガポール (中国系)	北京語・英語・日本語	61

S は、日本人の父親がアメリカ移住後に生まれた日系アメリカ人で、今回が初来日である。母国の大学では日本語を専攻しなかったが、家庭ではしばしば父親と日本語で話すことがある。一方、K は北京語を母語とする中国系のシンガポール人で、大学では日本語を専攻し、東京近郊で二ヶ月間ほどホームステイを行った経験もある。

② 日本人協力者（夫婦二組）

留学生の訪問先は、以下二組の日本人夫妻である。T 夫妻の夫は北米を中心に年に数回海外出張を行う会社役員で、英語に堪能である。T 宅を訪問して約一ヵ月後に二人は Y 宅を訪れた。Y 夫妻の夫は定年まで中央官僚として勤務し、その間には妻子を伴って二回の海外駐在（アジア内二カ国）を経験している。

◎表 2：日本人協力者のプロフィール

仮名	夫	妻	住まい
6 月実施：T 夫妻（50 代）	会社役員	専業主婦	杉並区／一戸建て
7 月実施：Y 夫妻（60 代）	NGO 役員（定年後）	専業主婦	世田谷区／マンション

3.3. リサーチクエスチョン

冒頭で述べた通り、筆者が録音データから受けた印象は、NS の日本的な事柄の説明には一般的なものと個人的なものの二つがあり、それに応じて留学生の談話への関与や談話全体の展開が異なる、というものであった。そこで、まずは留学生の談話に対する関与の深淺が単なる印象なのか確かめることを第一のリサーチクエスチョン（以下 RQ）とする。次に、二組の日本人夫妻からは公私二種類の表現がどのような頻度で現れ、その差が談話の展開にいかなる影響を与えているかを第二の RQ とした。

3.4. 研究方法

留学生の談話に対する関与を比較するために、本研究では誰が新しい話題を始めるかに注目して調べた（RQ1）。頻繁に新しい話題を持ち出す人間は、談話の方向性を決めるキーパーソンとして他の参加者に比べ会話に深く関与している可能性がある。しかし、それだけでは話の流れを無視して次々と話題を持ち込んでいる可能性も否めないため、個々の話題を「異種・同一・派生」という三つのパターン（メイナード 1993）で分類する。これは「相互テーマ展開構造」のパターンと呼ばれ、話者間でいかにテーマが展開されるかを調べるための分析枠組である。本研究はこの枠組を用い、先行会話とは異なる新しい話題を「異種」、先行の内容を受けて更に展開する話題を「同一」、関連性はあるが流れを直接受けずに異なる方向に進む話題を「派生」と呼ぶ。次に、二つの会話データで、どのように、なぜ会話参加者の関与の度合いが異なるのかを調べる（RQ2）ため、「社会一般」及び「話し手個人」の 카테고리を用いた談話分析を行い会話間の差異を調べる。

先行研究で述べた通り、NS-NNS の接触場面を取りあげて話者間の非対称性や「日本人」という統一体が前提とされる点を明らかにする実証研究は、その大半が会話分析によって局所的な会話のしくみを明らかにするものであるが、本研究はこれらの問題点を談話分析による数量的な言語分析から追求する。

4. 分析

4.1. 分析対象箇所を選定—「お袋の味」

分析にあたり、まず二つの会話データから同じ話題の箇所を抜き出す。本研究は、文法要素ではなく発話内容や意味に注目したカテゴリを使うため、異なる話題での比較は難

しいと判断し、挨拶や自己紹介等の開始部終了後、最初に現れる共通の話題を分析対象箇所として選んだ。それが留学生の調査テーマのひとつ、「お袋の味」をめぐる会話である。

4.2. 分析・1—留学生の会話への関与

誰が新しい話題を提供しているかを調べるには、談話を話題ごとに分節する必要がある。そこで、分析対象である「お袋の味」の部分を話段という分析単位に区切る。話段というのは「談話の内部の集合体（もしくは1発話）が内容上のまとまりを持ったもので、談話を構成する会話のまとまり」（ザトラウスキー1991）である。話題のかたまりを、誰が、どのように構築しているのかを、談話の流れから明らかにする場合に有効な分析単位としてしばしば使用される（佐久間2000、西條2002など）。

こうして対象となった二つの「お袋の味」は、話段数・継続時間ともに異なるため、先に終了するT宅の発話数（82発話）にあわせ、Y宅データからもほぼ同数の発話に相当する話段部分を抽出した。こうして話段ごとにその開始者と「相互テーマ展開構造」のパターンを分析したものが、次の表3（T宅）と表4（Y宅）である。

なお、自然会話では複数の話段が入れ子状に現れる現象や、話段同士のオーバーラップ現象がしばしば見られる。今回のデータでも、表3の話段5は異なる話題が平行に展開したため、カッコつきの話段とした。（実際の発話内容は会話例IおよびIII参照）

◎表3・T宅での「お袋の味」話段（計82発話）

No.	話段タイトル	開始	発話数	開始者	パターン
1	お袋の味の何が聞きたいか？	211	22	夫	同一
2	お袋の味は伝統的な惣菜だ	222	23	妻	同一
3	お袋の味は変わらぬ家庭の味だ	237	24	夫	同一
4	現代のお袋の味は何だろう？	274	25	S	派生
5	（このケーキがお袋の味だ）	279	26	夫	異種

◎表4・Y宅での「お袋の味」話段（計88発話）

No.	話段タイトル	開始	発話数	開始者	パターン
1	何を勉強しているのか？	152	6	夫	異種
2	お袋の味について質問したい	158	21	S	同一
3	お袋の味は広いテーマだった	180	1	S	派生
4	世代によってお袋の味は違う	181	6	妻	同一
5	Y家の子どもに作ったお袋の味は？	187	18	S	派生
6	インドのカレーは日本の漬け物に相当する	195	4	夫	異種
7	結婚後いろいろ工夫して味が変わった	199	13	S	派生
8	時代や年齢と魚離れ現象の関係	214	2	S	派生
9	日本人の味覚、昔はさっぱり今はこってり	231	16	S	同一

表3と表4を比較すると、留学生Sが話段開始者となる頻度の違いがわかる。また、「相

互テーマ展開構造」パターンでは、表3（T宅）がほぼ同じテーマが拡大することなく継続する一方、表4（Y宅）は派生パターンが多く、しかもその話題をSが始める場合が多い。つまり、同じ「お袋の味」というテーマでも、T宅での会話に較べてY宅ではSがキーパーソンとしてこのテーマに次々と新しいアプローチを試みており、それがうまく展開していることが窺える。三つのパターンの現れ方は談話全体の特徴を表わすと考えられるが、派生パターンに同一パターンが加わるY宅の会話は、本筋のテーマ（＝「お袋の味」）から大幅に脱線することなく、多角的に話題を展開していると言えよう。

4.3. 分析・2—なにが関与の深さを変えるのか？

分析1では二つの会話における留学生Sの談話への関与の違いを明らかにしたが、なぜそのような違いが発生するのだろうか。この点を明らかにするために、両データで留学生が発話を開始する派生パターンの発話内容と、その前後の文脈を調べることにした。そこで、話題の展開が良く非常によく似た会話例を二つ取り出して比較を試みる。

まず、T夫妻と留学生による会話例Iを次頁に示す。ここでT夫妻の語る「お袋の味」とは、辞書に見るような妥当な説明である。しかしその反面、話し手の主観や生活体験を反映した箇所は見られず、手作りのケーキに関しても即物的なコメントで終わっている。さらに、第四話段の下線部では若い世代の「お袋の味」に言及しているが、T夫妻の語る「若い人」とは世間一般の「若い人」であることに注目されたい。

一方のY宅でも（会話例II）「きんぴらごぼう」のような伝統的な「お袋の味」から若い世代の「お袋の味」へと、ほぼ同じ展開で会話が続くが、「最近の若い世代」について言及する時にT宅とは異なる展開が見られる。

◎ 会話例I・T宅の会話／第3話段の後半から4話段冒頭まで（268～280発話）

No.	留学生	日本人夫妻
第3話段	S：ふーん。	夫：（母親が作る家庭料理の味は）だからしょうゆとか、味付けがね、同じような。人によっては ほかのうちに行くと、少し塩がきいてる。こっちへ行くとカラシがきいているとかいうことがあったし、同じ系統の 味なんだよ。 夫：//このファミリー独特の// で、それは外では、外で食べられないでしょう、その味は？ それをいう。 妻：//あ お母さんのおりょう//
第4話段	S：それは今、今の、あの一、子どもたちとかに聞いたら、そういうのって、まだある と思いますか？	夫： <u>最近の若いうちは一どう？</u> 妻： <u>やってる人はやってるんじゃない や</u>

	<p style="text-align: center;"><u>っぱり</u></p> <p>夫： やってる？ふーん。//だけどー// 妻： //ハンバーグ//とかいうけど</p> <p>S： でも、その一、あの、ハンバーグとかが、 違ってきてるっていうことは、昔はきんぴ らゴボウ、で、今はハンバーグ…</p> <p>妻： そう、そうだと思う。だから<u>今の子が、 あの、若い人だけの、要するに、小さい 子どもと若いお父さん、お母さんたち</u> だと、多分きんぴらは作らないんじゃない っていうのはある。ハンバーグとカレー ライスと//スパゲティとか//</p> <p>夫： //ちょっとそれ//食べてみて。これが お袋の味。(手作りのケーキを勧める)</p> <p>SK： @@@@@ (笑)</p>
--	--

次頁の会話例Ⅱが示す通り、Y 宅では若い世代全般の「お袋の味」としてハンバーグやケーキが登場した後、話し手の思考が一般論から自分の子供や未来の孫とへと移り（第四話段）、話段は個人的な話題で終わっている。ちなみに、どちらの夫妻にも成人した二人の子供がおり、就職や結婚によって全員独立したが初孫はまだである。

以上のように、S の関与の深さが異なる二つの会話には、一般論が継続されるか、或いはそれが更に個人的な領域へと転換するか、という文脈のちがいがあることがわかった。

◎会話例Ⅱ・Y 宅の会話／第 4 話段後半から 5 話段冒頭まで（183～188 発話）

No.	留学生	日本人夫妻
第 4 話 段		<p>妻： (自分達の世代は) ああいうもの (=きんぴらごぼう) だ とか ひじきだとか そんなものが 一番多く食べていた ので どうしてもそこにこういっちゃうんですけど それ こそ肉じゃがとか でも 時代とともに 変わっているか も//しれませんね//</p> <p>夫： //変わってるだろうね// おそらくねえ</p> <p>妻： <u>若い人に（「お袋の味」は何か）聞いてみたらケーキが出 るかもしれないですね</u></p> <p>夫： なるほどねえ 少なくとも僕らよりも上の年の人のイメ ージでもってお袋の味っていったらまさに肉じゃがだし なんだっけさっきいったの きんぴらとか そんなとこが 出てくるんだろうけど <u>僕らより若い世代になると違っ ているだろうね</u> <u>おそらくうちの子どもに聞いても君のお 袋の味ってなに？って（聞いたら） ハンバーグとかなん か言うと思うよ僕は XXX（聞き取り不能） ハンバー</u></p>

	<p>グなんて特にあれだな 子どもが出来てから××× だから <u>うちの子どももまた子どもが生まれたら孫ができたら</u> 孫に言わせるお袋の味って変わってくるかもしれないね</p>
第5話 5 話 段	<p>S: じゃあ (Y 家で) <u>育ててきたお袋の味</u>ってのは どういうもの煮物とかきんぴらごぼうとかですか</p> <p>妻: <u>特別お袋の味って言って (子供を) 育てたことはないんですけど</u> ただふっと思いつくのは そういう日本に一番多くあったおかず っていうか家で一番普通のおかず</p>

次に、この特徴の違いが後続の談話展開に与える影響を考えてみたい。そこで、両夫妻の発話のなかで、発話の方向性が変化した直後に S の発した質問に注目して比較を行う。

一般的な説明で終わった T 宅では「でも、その一、あの、ハンバーグとかが、違ってきてるっていうことは、昔はきんぴらゴボウ、で、今はハンバーグ...」と一般的な内容を問う質問が続いた。一方、Y 宅では「じゃあ (Y 妻が) 育ててきたお袋の味ってのは どういうもの 煮物とかきんぴらごぼうとかですか」と、相手個人に向けた質問をしている。つまり、日本人側が「日本」の一般的文化論から「私」という個人的領域にシフトしたことによって、留学生にもその「私」だけの文化を探究する視線が生まれ、私的な質問が登場したと考えられる。

そこで、公私二種類の発話の出現傾向を調べるため、日本人夫妻が会話で使った表現を抽出して二つのカテゴリーをつくって分類し (表 5)、発話者別にその出現を調べた (表 6)。

話段数が異なるため単純比較はできないが、T 宅での話題が社会一般を中心に展開していることがわかる。一方、Y 宅では社会と個人の話題がバランス良く現われ、会話の進行につれて話し手個人の観点による発話が増えている。実際に、前掲の会話例 II (Y 宅) に戻ってその展開を辿ると、「若い世代」(一般/Y 夫・妻) → 「うちの子ども」(個人/Y 夫) → 「(Y 妻が) 育ててきた味」(個人/S) という具合に、留学生と Y 夫妻の双方によって一般カテゴリーから個人カテゴリーに向かって連なるように語られていることがわかる。

◎表 5・日本人夫妻側のカテゴリー別表現一覧

社会一般	話し手個人
<p>私たちの時代 (世代)、親の世代、親から、僕らよりも上の年の人、若い人、最近の若い家は、我々の時代、伝統的には、今は、みんな、昔は、今は、昔の日本は、大部分は、常識的には、それぞれの家のしきたり、その家独特の、日本人の、〇〇 (※国名) の</p>	<p>私にとっての、うちの娘たち、うちの子ども (孫)、私は、私たちは、子どもたちは、自分は、僕らは</p>

◎表 6・社会一般および話し手個人の話題の分布（発言者別※出現順）

No	T宅・社会一般	T宅・話し手個人	No	Y宅・社会一般	Y宅・話し手個人
2	妻		2	夫	妻
3	夫、妻	妻	3		(Sの独話)
4	夫、妻	妻	4	妻、夫	夫
5	夫、妻		5		妻
計	7 (夫3・妻4)	2 (夫0・妻2)	6	夫、妻	
※Y宅第3話段はSの独話。 ※第1話段は両宅とも「お袋の味」説明開始前 ■話段あたり「一般：個人」平均出現数 一般：個人=T宅(1:0.5) / Y宅(1.12:1)			7	夫	妻、夫
			8	妻	妻、夫
			9	妻、夫	妻
			計	9 (夫5・妻4)	8 (夫3・妻5)

◎ 会話例Ⅲ・T宅の会話／第5話段（前掲の会話例Ⅰに続く部分：281～292発話）

留学生	日本人夫妻
	夫：これこれ。これ、他のレストランでこんな味はない。ちょっと食べてみて。
	妻：だから <u>うちの//娘たちに←</u>
	夫：//家庭// 家庭的な 味。←
	妻： <u>そうね、あなたのおふくろの味はな一にって聞いたら、何て答えるかしら</u>
	<u>ね一。←</u>
	夫：どう？←
K：おいしい。	
	妻：@@@@@（笑）。
	夫：おいしいけど、おいしいけど レストランではそんな味ない
	妻：ケーキ屋さんの味ではない。ねえ、素人っぽいというか。
	夫：うん
SK：うん	
	夫：これがね、おふくろの味

実は、会話例Ⅲ（T宅※会話例Ⅰの後続部分）でも妻の個人的な発話（娘について）が現れたが、同時に異なる話題（ケーキの味）が出現して、個人の視点による説明が成立しなかった。会話参加者が協同で私的領域へと会話を構築した会話例Ⅱとは対照的である。

こうして Y 夫妻が社会と個人の双方の領域による発話を繰り返した後、S は次のような質問をした（第8話段後半）。

S：「じゃあ最近は なんか聞いたんですけど肉とかが多くなってきて なか
いまの時代は 日本では魚ばなれの時代といわれているんですけど それは
この家でも同じでしたか？」（Y宅データ第8話段の開始発話）

西阪（1993）は日本人アナウンサーAと留学生Bによるラジオの対談番組を分析して、Aは「『日本人』同士の事柄についての知識を優先的に主張する権利を、Bにたいして主

張」していると指摘した（西阪 1993：p.231）。つまり、社会一般の話題が続くと NNS には積極的な発言がしにくいのである。しかし、本研究の分析から、そのような「『日本人』同士の事柄」であっても、NNS が発言の突破口にできるのが私的領域の話題ではないかと筆者は考える。但し、談話全体が社会一般をめぐって推移しているところへ突如質問の方向を個人に向けることは難しい。Y 宅のようにトピックが社会一般から私的領域へとシフトする頻度が多く、その内容もごく個人的な場合には、談話全体が留学生の視線や質問を私的領域に向かうことを助ける。この S の質問が「最近」「いまの時代」から始まって「この家」に到着できたのは、談話全体の流れが個人に向かっていたからといえよう。

5. 結論

今回分析した留学生と日本人協力者の会話データでは、文化的な話題に会話が及んだときに日本人協力者が一般的な発話による説明をすると、留学生も同じく一般的なレベルで発話を続け、同時に談話への関与は浅くなる。一方、日本人側が社会一般的な発話に加えて個人的な経験や意見を表明したときは、留学生が相手の個人的な領域の質問をすることが可能になるため、派生パターンで自発的に話段を始めることが容易になる。その結果、談話は全体として長く多角的に発展する傾向が見られた。

本研究では、多角的な談話展開と留学生の談話への積極的関与が難しくなる理由として日本人協力者による「お袋の味」に対する一般的な説明や描写に注目した。一般的な説明とは会話例を見てもわかる通り、特定の文脈を離れて「お袋の味」を抽象化・単純化して表現したものである。それゆえこの説明は、実際には統一体とは言えない集団に「日本人」という枠をつくってある種の特徴を付加した語彙と同種のものであるということがわかる。

これらの言語的要素を検討する上で示唆的なのが、ヴィゴツキーの言語心理学理論における語の「意味」と「意義」である。この二つについて、ヴィゴツキー研究の第一人者である中村は、トマトを例に次のように説明する。トマトという語の「意義」とは広辞苑の記述のように「広く一般性と客観性を持ったもっとも安定した規格化された内容」で、一方の「意味」とは農家やトマト嫌いの子供など「人や状況によってまったく異なる内容」である。それゆえ、後者は「状況と共に絶えず変化し、意義をはるかに越えて、いわば無尽蔵の豊かさを持つ」（中村 2004 印刷中）という。T 宅で語られた「お袋の味」はこの「意義」にあたり、一方、Y 宅での「お袋の味」は「意味」にあたることわかるだろう。

注目すべきは、この二つが対極の関係でも全く異質のものでもないという指摘である。中村によれば、「客観的事実を反映した意義的な内容」も、ひとたび情動や特定のイメージと共に個人の意識の内部に取り込まれると、その人固有の「意味」に変わるという（中村 同）。つまり、「意義」は「意味」の“素材”ともいえる間柄なのである。

ここで、日本語教育における「文化」をめぐる議論をふりかえってみると、興味深い仮説が浮上する。統一体としての「日本人」「日本文化」とは、「意義」としての「日本人」「日本文化」と考えられ、確かにこれらを学習者に教授することはステレオタイプの強化や自文化中心主義に陥る危険性がある。しかし、「意義」は「意味」に変化するというヴィゴツキーの言語理論が正しいならば、統一体としての「日本人」「日本文化」を教授することは是非よりも、重要なのはむしろ「意義」を「意味」へと転換しうることが学習者にあるかどうかということになる。例えば、トマトの「意義」しか持たない人でも、日々

の生活体験やその記憶から創造されるイメージの付与によっていつしかその人なりの「意味」が誕生するように、一番初めに「意義」が形成されることはあまり問題にならない。不可欠なのは、新しい体験に数多く出会える環境と、「意義」に収まりきれない内容に出会った時に「意義」への認識を更新して自分なりの「意味」へと（再）構築できる学習者自身の姿勢である。この点で、細川（2000）の「学習者自らが、異社会を体験し、その過程で他者の文化の多様性を発見していくという問題発見解決の実践こそ必要であろう」（同 p.22）という指摘は正鵠を得ている。

とはいえ、学習者の生活体験の量や質によっては、対象となる事象に関する経験が乏しく、日本の社会や人々についての「意義」を豊かな「意味」へと転換しにくい場合も予想される。つまり、彼らの意識内にあるものだけでは足りない場合である。そんな時に、日本人協力者の「意味」—今回の家庭訪問プログラムの場合は、Y 夫妻によって語られた私的な「お袋の味」—からの類推や共感が有効となるのではないだろうか。

ここに至って、文化学習で日本語教師が果たすべき役割も明確になるだろう。教室外で学習者がさまざまな体験に挑戦できるよう配慮することと、文化や人間に対する柔軟な視点を持てるようサポートすることの二つではないかと筆者は考える。

6. 今後に向けて

ビジターセッションや家庭訪問に際して、「間違いのない正しい知識を留学生に教えなくては」という使命感を持って接触場面に臨む日本人協力者を時折見かけるが、本研究の結果が示すように、学習者が日本語で積極的に話すという目的の上では「正しい知識」は必ずしも有益ではない。むしろ、協力者の体験談や個人的な意見のほうが談話の発展する可能性が高く、統一的な日本人イメージからの脱却も期待できる。

従って、接触場面と文献調査を組み合わせたプロジェクトワークのような学習活動では、まず教師自身が「一般的な概要は文献で調べ、インタビューでは個人の経験や意見を中心に聞く」という使い分けを意識し、学生と日本人協力者に理解を求めることが必要だろう。

本研究は、二名の留学生が行った二回の家庭訪問から得た会話データを分析したもので、T 宅に次いで Y 宅という順序で訪問を行った。そのため、学習効果による影響を否定できないという限界がある。今後は、訪問順序が逆のデータや、別の学習者による訪問のデータなどを分析することで理論の検証を続けたい。

最後に、今回の分析箇所では「お袋の味」により高い関心をもっていた留学生 S が留学性側の発話の大半を占めていたが、他の話題の部分ではもう一人の留学生 K も積極的に会話に参加していたことを付け加えておきたい。

参考文献

- 尾崎明人・ネウストプニー,J.V (1986)「インターアクションのための日本語教育—イマージョンプログラムの試み」『日本語教育』第 59 号 pp.126-141
- 門倉正美 (2001)「メディアを思考 (志向・試行) する—日本事情としてのメディア・リテラシー」『21 世紀の「日本事情」』第 3 号 pp.82-92
- 河野理恵 (1999)「異文化コミュニケーションとしての『日本事情』—エスノメソドロジ—からの示唆」『21 世紀の「日本事情」』創刊号 pp.40-53

- 西條美紀（2002）「接触場面における話段の形成過程について」『第 11 回社会言語科学会研究大会予稿集』 日本社会言語科学会 pp.63-68
- 佐久間まゆみ（研究代表者）（2000）「日本語の文章・談話の『段』の構造と機能」『平成 9 年度～平成 11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書』
- ザトラウスキー，P（1991）「会話における『単位』について—『話段』の提案」『日本語学』10 卷 10 号 pp.79-96
- 鈴木伸子（2004※印刷中）「日本事情クラスにおける家庭訪問プログラムの試み」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第 7 号 国際交流基金
- 泉子・K・メイナード（1993）『会話分析』くろしお出版
- 中村和夫（2004※印刷中）「ヴィゴツキーの内言理論における『意味』の存在形態について」『心理学』24 卷 2 号
- 西阪仰（1993）「異文化性の社会的構成—たとえば日本人はどうやって日本人となっていくか」『明治学院大学論叢』通巻 514 pp.223-249
- 細川英雄（2000）「崩壊する『日本事情』—ことばと文化の統合をめざして」『21 世紀の「日本事情」』第 2 号 pp.16-27
- 舩見蘇弘美（1997）「日本人との接触場面のためのインターアクション能力の開発—海外（オーストラリア）学習者の日本人家庭訪問を通して」『平成 9 年度日本語教育学会春期大会予稿集』 pp.45-50 日本語教育学会
- 箕浦康子（研究代表者）（2002）「日本における文化接触研究の集大成と理論化」『平成 12 年度～13 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書』 pp.1-26

*）SPOT とは、ひらがな一字が空白になっている短文のテープ録音を聞きながら穴埋め作業をするテスト。1990 年に筑波大学留学生センターで試用され、従来型のプレースメントテストとは高い相関を示した。詳細は小林ほか（1996）「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『世界の日本語教育』6 号,pp.201-217 参照。